

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 3月31日現在

機関番号：33202

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22610021

研究課題名（和文） 子どもの抑うつに関連する要因についての探索的研究

研究課題名（英文） Exploratory study of factors related to depression in children

研究代表者

大平 泰子（OHIRA TAIKO）

富山国際大学・子ども育成学部・講師

研究者番号：00555188

研究成果の概要（和文）：本研究では、ライフスタイルや家庭環境を含めた環境的要因およびうつ病・うつ状態によって派生する問題について明らかにすることを目的として、インタビューや質問紙調査等を実施した。子どもの抑うつに関連する要因や学校適応について検討するとともに、中学生を対象としてストレス対処や心の健康等に関する健康教育の授業を行った。

研究成果の概要（英文）：In this study, we carried out interviews and questionnaires in order to clarify the environmental factors such as lifestyle and home environment, and identify the problems that may have been caused by depression. We examined the factors that were related to depression of the children and how they adjust themselves at school, and then gave lessons to junior high school students on mental health.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：子ども学（子ども環境学）

キーワード：うつ病・子ども・生活習慣・リスク要因・学校不適応

1. 研究開始当初の背景

（1）子どもをとりまく環境

変化の激しい時代にあって子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しており、子どもの発達や心身の健康などに関する新たな問題が生じてきている。文部科学省によれば、平成20年度の長期欠席者のうち「不登校」を理由とする児童生徒数は12万7千人に達し、特に中学校においては35人に1人が不登校という現状である。さらに、授業時間中に私語が絶えなかったり歩き回ったりと小学1年生が集団生

活になじめない「小1プロブレム」や、中学1年生になった途端に学習や生活の変化になじめず不登校となったりいじめが急増したりする「中1ギャップ」が、近年、新たな問題として注目されはじめている。地域社会や家庭においても教育力の低下が問題になっており、子どもたちの生活や遊びの質も変化してきている。例えば、児童期に特徴的な「ギャング集団（仲間同士で徒党を組んで大人の干渉を嫌って行動する）」はほとんどみられなくなり、このような経験の不足が友好的な対人関

係を築きにくい青年の増加の一因になっていると考えられている。子どものライフスタイルについても、「生活が夜型化して生活リズムが乱れている」、「便利で豊かな生活をして運動刺激が少ない」などの問題が指摘されている。このような現代的状況が子どもに与える影響が懸念される。

(2) 子どものうつ病

元来、うつ病は中年期以降に発症するもので、子どものうつ病はきわめて稀と考えられていた。しかし近年、大人と同様の抑うつ症状をもつ子どもの存在が注目されるようになり、これまでに認識されていたよりもはるかに多くのうつ病の子どもが存在することが明らかになってきた。欧米の疫学研究によると、子どものうつ病の有病率は、思春期前で1~3%、思春期で3~9%と考えられている。これはある時点でのお有病率であり、思春期の子どもがそれまでに1回でもうつ病エピソードを経験している率は20~25%に達するともいわれている。本邦では子どものうつ病に関する報告は多くないが、北海道大学のグループによる調査では、小学校4年生から中学校1年生の気分障害の有病率は、大うつ病性障害1.5%、小うつ病性障害1.4%、気分変調性障害0.3%、双極性障害1.1%であった。

(3) 子どものうつ病に関連する要因

子どものうつ病は大人とは異なる特徴がある。勤労者ではうつ病による生産性の低下が注目されているが、子どものうつ病においてはどのような事象と関連がみられるのだろうか。例えば冒頭に述べた不登校の問題についても、不登校状態の継続理由は、「不安など情緒的混乱」35%、「無気力」29%となっており、ここには精神医学的な問題が潜んでいることが示唆される。中部労災病院心療内科の調査においても、思春期に好発する問題行動（リストカット、不登校など）を呈する患者では、診断分類は気分障害が最も多くみられた。抑うつが子どもの発達、学業などに悪影響をおよぼす可能性があると指摘されているものの(Bhatia SK ら,2007)、この問題についての知見は乏しく、特に本邦においてはほとんど報告がない。また、小児期のうつ病に関する概念は様々で未だ統一した見解は得られていない。子どものうつ病リスク要因については性別、家族歴、ライフイベント、パーソナリティ、否定的認知、対処行動、対人関係上の問題などが挙げられており(Garber J,2006)、十分な知見は得られていないが子どもの場合には成人のうつ病よりも環境的要因や周囲との人間関係による影響が深く関わっていると考えられる。本研究においては、子どもの抑うつに関連するライフスタイルや家庭環境を含めた環境的要因について検討する。子どものうつ病についての理解、治療および予防的介入にむけての貴重な資料になると予

想される。

2. 研究の目的

本研究は、子どもの抑うつに影響する要因およびうつ病・うつ状態によって派生する問題について明らかにすることを目的として行われるものである。小・中学生を対象とした質問紙調査、うつ病の子どもを対象とした臨床研究によって、これらの問題にアプローチする。本研究では特にライフスタイルや家庭環境を含めた環境的要因について検討するが、この点に着目して大規模な調査を行った研究はほとんどみられない。子どものうつ病についての理解、治療および予防的介入を考える上できわめて有意義な研究である。

本研究の遂行にあたっては、次の点を明らかにする。

(1) 子どものうつ病の時点有病率の推定

質問紙調査の結果から小・中学生におけるうつ病の時点有病率を推定する。また、年齢による差、性差、居住地域による差を検討する。諸外国、他の都道府県の調査結果との比較検討を行う。

(2) 子どものうつ病の特徴及び予後の把握

追跡調査を含む臨床研究および大規模調査の結果から、子どものうつ病の特徴、予後などについて把握する。

(3) 子どものうつ病・うつ状態によって派生する問題についての明確化

うつ病・うつ状態によって生じる行動上の問題、対人関係の問題、学校における適応の問題などを明らかにする。

(4) 子どもの抑うつに影響する要因についての明確化

うつ病の発症や抑うつの程度に影響を与える要因について検討する。特にライフスタイルや環境的要因に焦点をあてて検討する。

(5) 予防的介入の可能性についての検討

本研究の結果に基づいて集団に対する予防的介入のためのプログラムを検討する。

3. 研究の方法

本研究では、小・中学生を対象とした調査および臨床研究を行い、(1)子どものうつ病の特徴と有病率、(2)うつ病・うつ状態によって派生する問題、(3)抑うつに影響する要因について明らかにする。質問紙による調査を実施し、抑うつに関連する要因を明らかにするとともに、追跡調査のためのベースラインを測定する。調査対象者の一部については追跡調査を行い、抑うつ傾向の上昇を予測する要因を抽出する。これらをふまえて、子どものうつ病に関する予防的介入の可能性を検討する。

4. 研究成果

(1) 子どもの抑うつに関する研究動向に関

する文献調査を行い、児童・青年期における抑うつ症状および予防的介入についての先行研究を概観した。また、スクールカウンセラーや教育相談担当教員など学校生活で子どもたちと身近に関わる専門職に聴取し、学校現場においてよくみられる問題やそれらの背景などについて最近の実態を把握した。うつ病等の精神疾患や注意欠陥・多動性障害等の発達障害といった特別な支援を必要としている児童・生徒が、学校教育現場の中で増えてきている。インクルーシブ教育に配慮したやさしい学校を運営していくために、教員間における理解はもちろんのこと、子どもたちや保護者間の理解を図っていく上でも、用語表記は重要である。用語から受けるイメージについての調査を行い、その特徴や差異を把握するとともに、用語表記が社会等に与える影響について検討した。

(2) 諸外国における子どものメンタルヘルスケアの実態について把握するため、今回は高福祉国家として知られるデンマークをとりあげて視察調査を行った。国民の高い幸福感を創出・維持する社会システムに関する実態調査を実施した。University of Southern Denmark Child and Adolescent Psychiatric Dept.では、デンマークの医療システム、患者統計と最近の傾向、当該施設における治療の実態等について説明を受けた。Ørnhøj Skole (ウアンホイ小学校)では、子どものメンタルケアを担当している AKT 指導員 (AKT-Vejleder) にデンマークの教育現場におけるメンタルヘルスケアの実際についてのインタビュー調査を行った。デンマークの小学校においては、不登校が殆どみられないなど本邦とは問題の現れ方が異なることを把握しえた。

(3) 小・中学生を対象とした質問紙調査の実施に先立って、大学生 74 名を対象とした質問紙調査を実施した。家庭生活満足度、学校生活満足度、生活習慣、パーソナリティ、抑うつ症状等に関する自己記入式の質問紙調査を実施した。家庭生活満足度、パソコンでゲームをする時間などいくつかの項目において抑うつ症状と有意な関連がみられた。

(4) 富山県内の公立中学校において、中学 3 年生 126 名を対象として、家庭生活満足度、学校生活満足度、生活習慣、抑うつ症状、抑うつスキーマ、学校不適応等に関する自己記入式の質問紙調査を実施した。その結果、家庭生活満足度、学校生活満足度、大便を朝にする、運動する時間、外で運動する時間、パソコンでゲームをする時間、パソコンでインターネットをする時間、抑うつスキーマなどの項目において、抑うつ症状との相関が認め

られた。学校での不適応については、孤立傾向と反社会的傾向を測定した。抑うつ症状は、孤立傾向との関連はみられたが、反社会的傾向との関連はみられなかった。何か困っていることが「ある」と回答した生徒は 43.2%で、その内容としては、特に、勉強や受験に関すること、友達との関係が多くみられた。なお、学校保健活動の有用な資料となる情報を提供するため、調査を実施した学校に対して、対象者全体についての調査結果概要を書面にてフィードバックした。生徒に対しては、本人が結果の通知を希望した場合に、個人の調査結果について書面によるフィードバックを行った。

(5) 中学生を対象に健康教育の一環として、ストレス対処や心の健康に関する授業を実施した。授業実施の前後で受講生徒の抑うつスキーマを測定したところ、授業前と比較して授業後には抑うつスキーマ得点の低下が認められたが、長期的な効果についても測定する必要がある。今後は、学校領域における心理教育導入の可能性について検討したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- (1) 村上 満, 一ノ山隆司, 舟崎紀代子, 山本小百合, 吉岡一実, 「障害者」と「障がい者」の表記イメージに関する研究, (財) 緒方医学化学研究所「医学と生物学」, 査読有, 6月号, 2013, 1356-1360
- (2) 北川信樹, 認知行動療法は双極性障害に有用か?, Depression Frontier, 11(1), 2013, 39-45
- (3) Kimura H, Osaki A, Kawashima R, Inoue T, Nakagawa S, Suzuki K, Asakura S, Tanaka T, Kitaichi Y, Masui T, Kitagawa N, Kako Y, Abekawa T, Kusumi I, Yamanaka H, Denda K, Koyama T, Differences between bipolar and unipolar depression on Rorschach testing, Nueropsychiatric Disease and treatment, 9, 2013, 619-627
- (4) Mitsui N, Asakura S, Inoue T, Shimizu Y, Fujii Y, Kako Y, Tanaka T, Kitagawa N, Kusumi I, Temperament and character profiles of Japanese university student suicide completers, Comprehensive Psychiatry
- (5) 村上 満, 高校福祉科の「福祉の力」を

身につける取り組み, 大学図書出版「ふくしと教育」, 査読無, 第 14 号, 2013, 22-25

- (6) 大平泰子, デンマークにおける小学校のメンタルヘルスケア—ウアンホイ小学校視察報告—, 富山国際大学子ども育成学部紀要, 査読無, 第 3 巻, 2012, 153-157
- (7) Asakura S, Inoue T, Kitagawa N, Hasegawa M, Fujii Y, Kako Y, Nakato Y, Hashimoto N, Ito K, Tanaka T, Nakagawa S, Kusumi I, Koyama T, The Social Anxiety / Taijin-kyofu Scale (SATS): development and psychometric evaluation of a new instrument, Psychopathology, 45(2), 2012, 96-101
- (8) 佐々木郁子, 川野雅資, 一ノ山隆司, 村上 満, 神奈川県における児童、青年期精神医療の連携で看護師の役割を考える, 日本地域連携精神看護学研究会誌, 査読有, 第 2 巻, 2012, 71-77
- (9) 朝倉聡, 北川信樹, 小山司, 対人恐怖・社交恐怖の心理教育と症状評価, 精神療法, 37 (4), 2011, 387-395
- (10) 賀古勇輝, 北川信樹, 小山司, 気分障害における心理教育のすすめ方, 精神科, 18 (4), 2011, 387-392
- (11) 大平泰子, 芦原 睦, 心療内科で使われる心理テスト MAS [顕在性不安検査]・STAI [状態・特性不安検査], 日本心療内科学会誌, 査読無, 15 巻 1 号, 2011, 38-39
- (12) 大平泰子, 北川信樹, 村上 満, 鈴木道雄, 子どもと抑うつに関する研究動向—児童・青年期における抑うつ症状および予防的介入—, 富山国際大学子ども育成学部紀要, 査読無, 第 2 巻, 2011, 191-196
- (13) 北川信樹, うつと不安のメンタルヘルス—ストレス時代を生き抜くために—, 網走地方精神保健協会誌「クリオネの里」, 第 16 号, 2010, 4-10

[学会発表] (計 2 件)

- (1) 村上 満, 心のバリアフリー化と用語表記のイメージに関する一考察—「障害者」と「障がい者」表記によるイメージの特徴と差異について—, 日本イメージ心理学会第 12 回大会, 2011 年 10 月 15 日, 富山国際学園サテライト・オフィス 地域交流センター
- (2) 大平泰子, SGE 自我状態と YGPI パーツ

ナリティ特性との関連について—SGE'91 年版の併存的妥当性に関する大学生を対象とした追試研究—, 日本交流分析学会第 35 回大会, 2010 年 6 月 12 日, 愛知県産業労働センター (ウィンクあいち)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大平 泰子 (OHIRA TAIKO)
富山国際大学・子ども育成学部・講師
研究者番号: 00555188

(2) 研究分担者

北川 信樹 (KITAGAWA NOBUKI)
北海道医療大学・看護福祉学部・教授
研究者番号: 80312362

村上 満 (MURAKAMI MITSURU)
富山国際大学・子ども育成学部・准教授
研究者番号: 10555197

(3) 連携研究者

鈴木道雄 (SUZUKI MICHIO)
富山大学・大学院医学薬学研究部・教授
研究者番号: 40236013

(4) 研究協力者

山下委希子 (YAMASHITA IKIKO)
富山赤十字病院・臨床心理士
研究者番号: 70293298